第４１回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会
優秀賞

介護から学んだ人権

白河市立白河第二中学校　３年　　本田　侑樹

いつまでも思い出す。ひいおばあちゃんの介護で学んだ、人は最期まで人として生きるべきだということ。

私のひいおばあちゃんは、認知症を患い、今の自分のこと、家族の名前、季節や時間まで分からなくなってしまっていた。いつも話すのは、亡くなった自分の母親のこと。どこに行ったのかと、家族皆に尋ねていた。もう天国にいるよと言われては、そうなのかと寂しそうな顔をしていた。のちに知ったことだが、認知症は、今の記憶は薄れ、過去の記憶が強く出る為、自分が幼い頃に戻ったような感覚になるそうだ。その為、亡くなってしまった親のことでも、本人からしたら、さっきまで元気にしていた親が見えなくなったので、不安になって人に聞いているということだった。この時に、私達家族が、そのことを知っていたのなら、ひいおばあちゃんに寂しい顔をさせることが少なかっただろう。

ある時、母が大きな声を上げて、ひいおばあちゃんに怒りを露わにしていた。オムツを勝手に外してしまい、部屋の中が汚物まみれだった。母は泣きながら近所の親戚のおばさんに助けを求め、ひいおばあちゃんをお風呂に入れてもらっている間に、床や壁の掃除をしていた。私はまだ小さかったこともあり、違う部屋に行くように言われたが、この時の憔悴しきった母の顔は忘れることができない。

その日の夜、家族は遅くまで話し合いをしていた。ひいおばあちゃんを介護施設に預けるかどうか。私は、母がメインで介護をしていたので、もう辛そうな姿も見たくないし、預けた方がいいと思っていた。しかし、母は首を縦には振らなかった。小さいころから、ひいおばあちゃんに育ててもらった私の母は、自分の母親以上に、ひいおばあちゃんを大切にしてきた。いつも一緒に出掛け、何か頼まれることがあれば、自分のことより、ひいおばあちゃんを優先していた。

大好きだったんだ。

その大好きな気持ちが、認知症というものに、どんどん押しつぶされていく。母は、それにいつも抵抗して、また大好きな気持ちを取り戻していた。家族皆

が必死だった。
　何年もこのような状態が続くと、疲れがたまっていき、優しい心で介護することもできなくなっていた。
　ひいおばあちゃんは、最期までこの家にいたいと、元気な頃から言っていた。だから家族は介護施設への入所は考えていなかった。二十四時間、在宅介護で気が休まらず、一日中ピリピリとした空気が漂っていた。そのうち、昼間ひいおばあちゃんが過ごす茶の間には、用がない限り行かなくなった。日に三度の食事の時だけで、他の時間は違う部屋で過ごしていた。時々、様子を伺う程度で、ずっとそこで過ごすことはなくなっていた。
　一人ぼっちのひいおばあちゃん。
　本当は誰もそんなことを望んではいなかったはずなのに、家族の心が限界に達してしまったからといって、よかったのだろうか。毎日が葛藤だった。でも自分たちが倒れては、介護を誰がやるのか。答えが出ないまま、一日が終わっていく。そして自己嫌悪に陥るという日々。ただ、そこにいて息をしているだけに見えた、ひいおばあちゃんは、これまで沢山の愛情をかけて、子供たち、そして孫までを育ててくれたし、住む家も建ててくれたし、生活を支えてくれた偉大な人であるはずなのに、とても小さく、寂しく思えた。このままじゃ駄目だ。この状況は、ひいおばあちゃんへの恩返しどころか、ひどい仕打ちになっている。
　家族の絆を取り戻すために、皆で話し合いをした。昔を思い出してみると、ひいおばあちゃんの笑顔しか浮かばなかった。泣きながら、笑いあいながら、思い出話と、大好きだという気持ちを確かめ合った。認知症になってしまったから、人格も変わり、暴言も吐くようになってしまったけれど、ひいおばあちゃんという一個人は、何も変わりないのだ。
　まず、自分たちの認知症に対する偏見を無くすことや、ひいおばあちゃんが笑顔で生きるために、何が大切なのかを考え、行動していった結果、また皆が、ひいおばあちゃんがいる茶の間で一日の大半を過ごすようになっていた。家族がお互いを想い合い、手を取って支え合うことが、こんなに心通じるものだということに初めて気づいた。いつしか、ひいおばあちゃんの顔にも笑顔が戻っていた。
　今、介護問題というのは、社会でも話題になることが多いが、大半は悲しい現実である。お互いが笑顔になる介護は、本当に難しい。家族が協力して、解決に向けた一歩を踏み出せたからこそ、我が家は最期を家で看取ることができた。介護する側にも、してもらう側にも、老いや病気で偏見を持った生き方をさせてはいけないし、することもないのだ。身をもって教えてくれたひいおばあちゃんには、今でも感謝している。